

新世紀エヴァンゲリオンにみる思春期課題と精神障害

～14歳のカルテ～

溝部 宏二

1. はじめに

もともと、アニメ『新世紀エヴァンゲリオン』（ガイナックス企画、庵野秀明監督）は、1995年10月から半年間テレビで放映されたものの、その「最終二話（25話・26話）」でも物語は完結しなかった（それまでの話の流れを全く無視した不可思議な結末となっている）。そこで、様々な憶測や批判が集中した。大塚は、「現実と一切、切り離されたところで自己実現してしまう」と述べ、宮崎は「自己啓発セミナーやサイコセラピーの手法を物語の中に取り込んでいて、形を変えた癒しである」と述べ、ヒーリングや自分探しという共同体の幻想を憂いている¹⁾。その後、1997年春に公開された映画「シト新生（DEATH&REBIRTH）」（テレビ版の回想と完結編映画の予告的内容）を経て、1997年夏に、テレビ版の最終二話をリメイクした形（テレビ版の第24話に続く形）で、映画「THE END OF EVANGELION（Air/まごころを、君に）」が公開されて、ようやく完結した。さらに、修正されたDVDビデオソフトが、99年に完成（DVDのリニューアル版の完成は2003年）したという経緯がある。劇場版DEATH編は、映画「シト新生（DEATH&REBIRTH）」の前半部分で、テレビ版の回想であり、「総集編」という言葉が使われていることが多い様だが、これを見ればテレビ版の「あらすじ」が分かるというような作りにはなっていない。テレビ版を

見た人が、レビューとしておさらいをする形式の映画となっている²⁾。更に2007年9月に「エヴァンゲリオン新劇場版：序」が、2009年6月に「エヴァンゲリオン新劇場版：破」が公開され、2012年秋に「エヴァンゲリオン新劇場版：Q Quickening」が公開予定であり、新劇場版の完結編である「エヴァンゲリオン新劇場版：？」が2013年に公開予定である。ストーリーはTV版から劇場版を経て新劇場版に至る過程で、曖昧な点が明瞭にされつつ観る者のファンタジーの介入部分が制限されている、所謂「まとまったお話」に向かっている様である。また、登場人物の「病理性」が薄まっており、普通の人々による普通の話？になり精神医学的に見てやや興味が薄れる作品となっていっている点は否めない。

では、なぜ『新世紀エヴァンゲリオン』が社会現象となる程、多くの若者（一部の大人）の心を捉えたのであろうか？よく言われているのは、謎解きの面白さである（前述の「曖昧な部分」が意図的？に散りばめてある）。ストーリーのあちこちにキリスト教・ユダヤ教・精神分析・進化論・脳科学・遺伝学などオタク心をくすぐる仕掛けがたくさんあり、仕掛けを調べるうちに、自分なりの「エヴァンゲリオンの世界観（ファンタジー）」を持つに至り「ハマる」のであろう（「ハマる」とは快感物質であるドーパミンが大量に分泌される状況である。「薬物依存」や「ゲーム依存」など嗜癖と同様のメカニズムである）。しかし、その様なコアな

ファンが「すごいぜ！」と啓蒙しても爆発的な人気となるには、普遍的関心を引く部分が必要であれば不可能であろう。ここでは、誰もが辿ってきた「発達」特に「思春期前期の課題」に焦点を当てて「『わかもの』と思春期前期の発達課題の克服過程」としてエヴァンゲリオンを観ていく。

2. あらすじ（主に「劇場版」をベースにした解説）

西暦2000年、南極で地球規模の大爆発（セカンドインパクト）があり、人類の半分が死滅した。同時に世界の気温が上昇し、海は生命が存在しない死海となった。2015年、人類（祖リリスから生まれ、知恵の実を食べし原罪を担うもの：別名リリン）は、その存在をおびやかす使徒（祖アダムから生まれ、生命の実を食べた？永遠の命を持ちしもの）と呼ばれる謎の生命体に対して、人造人間エヴァンゲリオンという科学力（知恵の木の実の結果）を使って戦っていた。アダムから生まれし使徒がアダムに帰還すれば大規模な爆発が生じ（サードインパクト）、人類は使徒により滅亡させられるのである。エヴァンゲリオンを操縦するのは、碇シンジ、綾波レイ、惣流・アスカ・ラングレーン等、母のない（孤独を抱えた）、14歳の少年少女たちである。そして、政府に疎まれながらも、全権を委ねられた特務機関ネルフ。だが、ネルフと、その背後にある秘密組織ゼーレは各々、全ての使徒（17番目の使徒）を殲滅した後に発動すべく、行き詰まった人類を新たな段階に人工進化させる「人類補完計画」を画策していた。そして、両者の補完計画の間には、大きな違いがあり、最後の使徒殲滅後、対立は決定的となり、全面的な武力衝突となる（ゼーレの補完計画は人類の手による滅亡にて贖罪を果たすこと、ネルフのものはエヴァをよりしるとして全ての人々の魂を集め単体として完全

な生命体である神となること）。双方の「補完」が同時に進む中、どちらの補完計画にも必要なエヴァンゲリオン初号機のパイロット、碇シンジに全てが委ねられ、苦悩の末、彼は、どちらの補完も肯定せず、もとの世界に戻ることを決意する。しかし、シンジの中途半端な気持ちが自分とアスカのみ肉体を実体化するにとどまって（他の人類は個としての形を失って融合したまま？）荒涼とした世界で二人だけが目を覚ます。ここに「新世紀」と共に「創世記」が始まるのである。

3. 主な登場人物と関連図

- エヴァンゲリオン（図1・2）：式号機、参号機、四号機以下量産機9機は第弐使徒アダム（神が地球に使わした生命の祖）より創られ、零号機（もしかしたらアダムから？）、初号機は第弐使徒リリス（神が誤ってアダムと同一惑星に送った生命の祖、一つの惑星には一つの生命体系しか存続できないが、地球ではアダムではなくリリスの子孫が繁栄した）より創られた。魂が存在せず、人間の魂をコアとして必要とする。

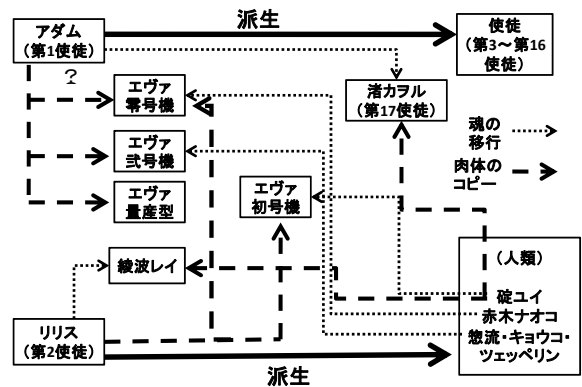


図1 登場人物関連図（文献2を改変）

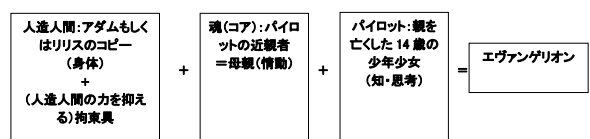


図2 エヴァンゲリオンの基本構成

パイロットは14歳の母親がいない少年少女のみ。S₂機関（使徒が持つ永久機関）非搭載の量産機以前のは、生命の実を手に入れておらず、ケーブルでの電力供給が必要である。エヴァも使徒もA.T.フィールドという絶対的（物理的）障壁を展開したり中和したりして相手と戦闘する。A.T.フィールドは誰もが持つ、「心の壁」であり、他者と自分を隔てるものである。このA.T.フィールドの取り扱い方が、このドラマの中心テーマである。ちなみに、A.T.フィールドによる障壁を停止しなければ、シンクロしやすいはずのエヴァのコア（たいていは親の魂）とでもパイロットはシンクロ出来ない。エヴァはパイロットが「心を開かないと動かない」のである。また、ロボットの様に見える外見は敵から防御する為の装甲板では無く、アダムもしくはリリスから創られた人造人間自身を人類がコントロールする為の拘束具である。

- 碓シンジ：14歳、エヴァンゲリオン初号機（人類の祖＝リリスの肉体のコピー）のパイロット。エヴァの魂（コア）にはシンジの母親であるユイが取り込まれている。傷つくのを恐れ、他者と関わることを回避する（社交不安障害や回避性人格傾向と言えるかもしれない）。人類が「滅亡する」か「他者と境界のない融合した世界」を選ぶか最終選択を託される物語の主人公。
- 碓ゲンドウ：48歳、シンジの父親で、特務機関ネルフの最高司令。エヴァに取り込まれた妻ユイとの再会を果たす目的で「人類補完計画」を推進する。目的のためには他人の命など平気で奪える自己中心性を持つ（自己愛人格傾向）。シンジに厳しい姿勢を示すも、息子とどの様に関わればよいか分からぬ、「成人期の課題」をクリアできずにいる弱さを最後に垣間見せる。
- 碓ユイ：享年27歳、シンジの母親。人類の進化には「永遠性（生命の実の獲得）」が

必要であると考え、自らの意志で魂をエヴァの中に残した。肉体は救出（サルベージ）されてレイが造られた。人類が知恵の実のみならず生命の実まで獲得することは神に匹敵する力を得ることであり、それを阻止する為に使徒が人類（リリン）を滅亡させようとするのである。

- 綾波レイ：14歳、肉体は碓ユイのクローン（肉体のスペアは多数存在）であり、魂はリリスのものが移植されている。碓ゲンドウによって創生されている為、自我は存在せず（零）である。しかし、シンジと接触するうちに、自我が芽生えてくる。また魂が人類の祖であるリリスのものであることから、人類共通の魂（霊）であり「太母」であるので母性に目覚めていく。ゲンドウの右手に埋め込まれたアダムの肉体を取りこみ、リリスへ帰還して、アダムとリリスの癒合を果たす役割を担う、ゲンドウの人類補完計画のキーパーソン。エヴァ零号機のパイロットであり、零号機（リリスの肉体のコピー）には開発者である赤木ナオコの魂がコアとして取り込まれている？リリスの魂であるレイがリリスの肉体である零号機にシンクロするのに時間を要したのは、零号機のコア（赤木ナオコ）がレイを排除しようとした結果であることが想像される（もしくは零号機はアダムの肉体のコピーの為か？）。
- 渚カヲル：14歳、肉体は？（ユイの性別を変えたコピー：A.T.フィールドを貫ける唯一の武器であるロンギヌスの槍でユイの遺伝子をアダムに組み込んだ、人類により創られた「17番目の使徒タブリス」）であるが、魂はアダムのものを移植されている。ゼーレは、カヲルとアダムの接触でサードインパクトを起こそうと試みるが、失敗したので、エヴァ初号機によるサードインパクトを試みる。
- 惣流・アスカ・ラングレー（新劇場版：式

波・アスカ・ラングレー)：14歳、エヴァ式号機のパイロットである。エヴァ式号機と接触実験中に母親惣流・キョウコ・ツェッペリンは精神異常を来す。父親はそんな親子を捨てて妻の主治医の女性と再婚する。精神を病んだ母親のためひたすら優等生であろうと努力する(機能不全家庭で育ったアダルトチルドレン)が、自己中心的となることで不安定な自我を支えている(演技性もしくは自己愛性人格傾向)。母親は自殺したとされているが、ゼーレにより魂を式号機に取り込まれている。精神的に崩壊寸前の状態で、式号機の中の母親と巡り会い、人と人との絆を回復する。自我が無い(真っ白な)レイのプラグスーツが白であるのに対して、血の通う人間(生理が存在する女性)の象徴として赤いプラグスーツを纏っている。母親キョウコのコア(魂)が覚醒していない時期に、アダムの魂であるカヲルにアダムの肉体である式号機は簡単にコントロールされる。新劇場版では、主要登場人物であるにもかかわらず名前が変更となっている。綾波・式波(敷浪)・真希波(巻波)は護衛艦からの命名。惣流(蒼龍)・赤木(赤城)・葛城・ラングレー・イラストリアスは空母からの命名である³⁾。母性から遠いものを空母名、母性に近いものを護衛艦名としている節があるので、キャラクターが「空母(蒼龍)×空母(ラングレー)」から「護衛艦(敷浪)×空母(ラングレー)」でやや母性的に移行しているのであろうか。

- 真希波・マリ・イラストリアス(新劇場版新キャラクター)：14歳、イギリス出身で、EURO支部所属。英語、日本語を自由に操るが、日本語の方が堪能。出生その他背景などは、現時点(破)では不明。元来EURO所有の仮設伍号機のパイロットであったが、日本に来てからは式号機に搭乗している。プラグスーツの色は白(レイ)

と赤(アスカ)の中間色であるピンク。エヴァに乗ることを「面白いから、いい!」と語り、それぞれ葛藤を抱えて搭乗する他のパイロットとの差が顕著である。いい加減に出来る健康さを示している様に見えるが、問題の矮小化を図ったり、否認したりする精神病理が存在するのかもしれない。

- 葛城ミサト：29歳、南極で発見されたアダムの調査中にセカンドインパクトが発生し、調査隊は葛城博士をはじめ、隊長の娘であるミサト以外全員死亡した。仕事ばかりで家庭を顧みない父親に反発しながらも父親の敵である使徒殲滅のためネルフに参加するアンビバレント(両価性)を抱えており、ネルフの作戦課長である。3歳時から母親の愛情を知らない14歳のシンジの親代わりとして、自らの欠けていた心の補完を果たし、母性を成熟させる。元恋人の加持リョウジと共に、実質的にシンジの自我の成長を促す両親としての働きをする。また「神児(シンジ)」と「言動(ゲンドウ)」の真意を理解し「ミサを司る人(ミサト)」として物語(人類補完計画)の進行役を務めている(本人は意識していないが)。
- 赤木リツコ：30歳、ネルフの技術開発部所属で、母親のナオコ亡き後E計画(エヴァ開発)の担当責任者。母親同様、科学者としての才能をゲンドウの愛人となることで搾取されている。母親の魂がエヴァ零号機にあることは自覚していないが、母親が作成し、自らの人格を移植した生体コンピューターシステム「マギ：東方の三賢人」を母親のように慕う。
- 赤木ナオコ：年齢不詳、エヴァ開発およびマギシステム(人格移植OS搭載スーパーコンピュータで、赤木博士の科学者としての・母としての・女としての思考パターンがインプットされ合議制判断を下す)開発責任者。ゲンドウの妻の面影を残す初代レイに嫉妬を覚え絞殺し、自らマギの上に投

身自殺した。死後？魂はコアとして零号機に封入されたことが示唆されている。娘リツコがゲンドウの殺害を試みた際に、マギの女としての部分であるカスパー（科学者としての部分はメルキオール、母親としての部分はバルタザール）が娘より昔の愛人ゲンドウに味方し、ゲンドウによる娘の銃殺に加担する。

4. エヴァンゲリオンを発達課題から読み取る

自我が脆弱であるが故に他者との関わりで傷つくことを回避し引き籠る主人公碇シンジが、自我が存在しないが故に恐怖感を与えない綾波レイや確立した大人の自我を持ちながら自分を手放しで認めてくれた渚カヲル、大人を装い他者を侮蔑することで自我を支えている惣流・アスカ・ラングレー、いい加減を装いつつも成人として引っ張ってくれる葛城ミサトとの触れ合い（渚カヲルは葛藤を表出しないが、他の者は、表現型は異なれども「心に欠損を抱えており」それをなんとか自分なりに補完している）で、「個」として存在する自我同一性を確立していく過程であると言えよう。

特に、何もない（零）のレイとの絆が深まるにつれ、お互いの自我が成熟してゆく反面、レイをも恐れ、一体化し、そして分離する流れは思春期の課題克服そのものである（ここに碇シンジの魂は補完されるのであるが、それは完璧で永続的なものではなく、傷つきながら修正し成長していくものである）。エヴァンゲリオンは主人公の成長物語（Bildungsroman）であり、古今東西のファンタジーと共通のテーマを持つ。

（何故14歳なのか？）

初期青年期（中学時代）にクリアすべき発達上の課題は、母親からの精神的離脱と自我理想（自我同一性）の確立がテーマとなる（表1⁴⁾）。中学生（平均して中2）になると、

表1 ライフステージと発達課題（文献4を改変）

0歳	誕生	乳児期
1歳	離乳	幼児期
3歳	親離れ	少年への過渡期
6歳	進学	学童期
12歳	思春期	青年への過渡期
15歳	同一性危機	青年中期
18歳	同一性確立	成人への過渡期
22歳	青年期危機 入社	大人の世界へ入る時期
28歳	成人前期 結婚	30歳の過渡期 (アラサー)
33歳	子どもの誕生 昇進	一家を構える時期
40歳	子どもの受験 転職・脱サラ	人生半ばの過渡期 (アラフォー)
45歳	中年危機・自殺	中年に入る時期
50歳	子どもの結婚	50歳の過渡期 (アラフィフ)
55歳	管理職	中年の最盛期
60歳	定年・退職・再就職	老年への過渡期
65歳		老年期

第二性徴に伴い「性」への関心が急激に高まるが、恋愛は本格化せず、自慰による解消が主となる場合が大半である。また、これまでの理想であった両親像が揺らぎ、それを支えられていた道徳観も脆弱化する。その代償として、友人との関わりの中で新たな自我理想を形成する必要性が生じる。友人や先輩を理想化するが、安定していない時期にある同胞像は破綻もしやすく、破綻した場合は対象消失に伴い、自分を支えるため空想的万能感に浸り、引きこもることも多い。つまり自我同一性を獲得するべく、「自分は何者であるか、自分はどこにどう立ち、これからどういう役割と目標に向かって歩こうとするのか」を模索する。この過程こそが、所謂「中2病(14歳病)」なのである。この過程で挫折した場合「(自我) 同一性危機」が生じる（表1）

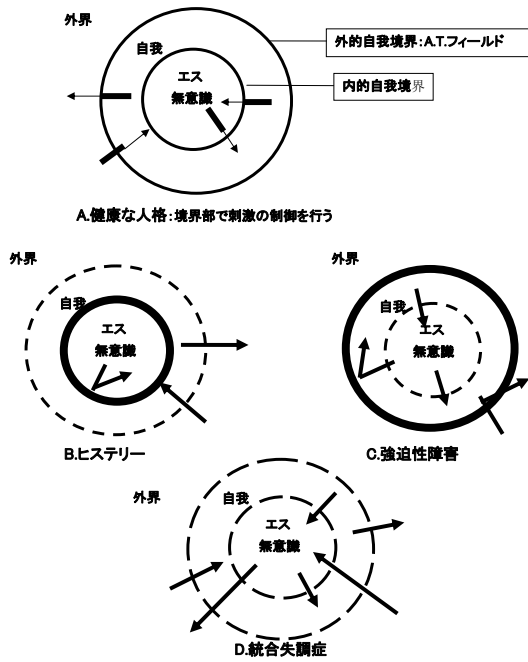


図3 自我境界と刺激制御 (文献 10・11 を改変)

ヒットラー・ユージェントの入隊年齢も14歳であり、地方の共同キャンプに9ヶ月間隔離される(シンジらが通う第3新東京市立第壹中学校と同じく)。更に、ナチズムの原型を作ったトウスは「『死への憧れ』が最も強いのは、14歳の少年である」と述べているのは興味深い⁵⁾。この自我の確立する不安定な時期に、ナチズムと出会わせて、与えられた自我で同一性を確立させられたとも言えるであろう。

(主要登場人物のカルテ)

精神科医として、診てもいない患者に診断をつける事は決して行ってはならない事柄である。何故ならば、診断とは「医師が様々な角度から患者の情報を集めて初めて可能である」からである。また、精神医学分野での診断(身体科に比べ客観的指標に乏しいので誰でも出来そうであり、逆に極めて難しい)を安易に行う事(例えばDSM-IV-TRなど操作的診断基準に患者の症状を当てはめるだけで診断を行う⁶⁾)は、単なるラベル貼りとなり患者を苦しめる結果になる。しかし、映画やアニメの登場人物を診断するのは罪が少

ないであろう。登場人物たちの生育歴、日常の姿、負荷が加わった際の姿および独白という自己イメージなどを参考にしながら診断を試みた。

(碓シンジのカルテ 14歳)

3歳時に母親を事故で失い、機を同じくして父親に捨てられる。先生と呼ばれる人物に養育されるが極めて自尊感情が低い子で、自己の欲求を表出する事無く他者と親密な関わりを避けることで卑小な自己の傷付きを回避する。また重要な事項は他者に依存し、自己の判断を行わない。回避傾向がみられるのは、社交場面であるというより自己にとって重要事項である点が重要である。

3歳からは他人に育てられ、他者の顔色を窺うようになり、上記行動上の特性から、回避性人格障害傾向を強く持っていると言えよう。

薄情な父親の愛情を獲得したいと切に願い、同一化を試みるが得られず、エヴァ(母親の魂が封印されている)に搭乗することで、母親の庇護の元自尊感情を高めることに成功する。また、それは父親が望む事でもあった。そうした過程を経て、父親を過度に恐れるエディプス葛藤を克服するに至り、父親への自己主張が可能となる⁷⁾。

また、同年齢の同性の友人(トウジ、ケンスケ)との関わりがサリヴァンの言う所のchumshipとして機能し、親代わりの(葛城ミサト、加持リョウジ)、異性(アスカ)および親友(カヲル)や母の面影を宿すレイとの濃厚な関わりで、エヴァ搭乗という非日常的関わりだけではなく、日常的関わりにおいても自我の同一性を獲得する後押しを得ることで、思春期前期の課題を克服するのである⁸⁾。最終的には、妻から自立出来ない父親や人類の更なる可能性を求めて、エヴァ初号期の肉体とともに去っていく母親からの自立も果たす。また、他者を恐れるあまり他人

との境界が無い世界を希求し、飲み込まれることを希望していたが、その願いを破棄して独りで立つ決意を固める。ラストシーンで「新世紀のアダムとエヴァ」となるべくアスカと廃墟と化した地球に立つ。

（綾波レイのカルテ 14歳）

碇ゲンドウの手による遺伝子操作（碇ユイのクローン）にて誕生し、生育は培養液の中であり、自己の出生の秘密を知る、著しい欠損を抱えた少女。

生みの親ゲンドウとの絆を最重要と考え、自我が存在しない（零）かのごとく、ゲンドウの命令に従順である。感情表出は極端に乏しく、他者との交流を好まない。以上より考えられる人格特性は統合失調症質（シゾイド）もしくは失感情症（アレキシサイミア）である。しかし、身体言語（身体化）を用いるシーンが観られないし、本当の意味での感情交流は無いが一見適応が良いアレキシサイミアより、シゾイドが考えやすいであろう。

遺伝子が似通うシンジ（実の子）との関わりで、感情の芽生えがあり（TV版や劇場版の後半や新劇場版ではその傾向がより顕著）、一足飛びに中期思春期の課題である「性同一性」「悲哀と空虚の体験」を経て「自我同一性の獲得」を果たし、更に成人期の課題である「子供（シンジ）を導く」段階へ至る。

最終的には、人類全てを包容し受容する大地の母である「太母」に目覚めるのであるが、シンジの自立（ひとつになる幻想の破棄）を認めた後に終焉を迎える。

（惣流・アスカ・ラングレーのカルテ 14歳）

仕事（ネルフの科学者）で家族を省みなかった挙げ句、精神に障害を来した母親キョウコからの愛情を得ることが出来なかった。機能不全家庭で幼少時期を過ごしたアダルトチルドレンが基本的性格特性を決めていると考えられる。父親が再婚した継母（母親の主

治医）との関係は表面的であり、愛情欲求が極めて強い反面上手く甘えられない。愛される為に過剰に頑張り、成功を追い求め続けるスーパーチャイルド（クリントン元大統領と同様）となる。14歳にして大学を卒業し、エヴァパイロットであるエリート意識が自我を支える根源である。

他者を見下し、自我境界を強化して何人をも寄せ付けないことで傷付くことから本当は脆弱な自己を防衛している（張り子の虎）。詳細は（A.T.フィールドと精神病）の項で述べるが、「アスカは、強迫的心性を持ち、無意識に存在するファンタジーの母親に強く影響されており、無意識に圧倒された自我は強固なA.T.フィールドにより外へも漏れ出せず自閉するしかなかった」との見方も出来る。しかし、表現型として自己愛性人格傾向も持つことは明らかで、この人格特性は、人格障害の大分類ではクラスターBに属するものであり、劇的な症状を伴う人格傾向がアスカの生きにくさの根源であると考えの方がスッキリと理解できる。

母親の自殺場面を目撃するというトラウマ（外傷体験）を負い、フラッシュバックが出現し「私を捨てないで！」と現在でもトラウマを生々しく体験している。その意味では外傷後ストレス障害（PTSD）と診断出来るかもしれない。しかし、アスカの問題点はPTSD症状自体より、このトラウマにより幼少時から形成されてきた人格特性（自己愛）が方向付けられたことが重要であると考えられる。

エヴァとのシンクロ率が低下し、見下していたシンジに負けたと感じると、プライドを維持するために引きこもる場面がある。この引きこもるパターンは、周囲に圧倒された卑小な自己像の傷つきを回避するシンジのパターンと異なり、自己愛的で誇大化された自己像の傷つきを回避するものである。対処行動は似ているが異なる心性に基づくのである。

劇場版のクライマックスシーンでは、エヴァに封印されていた母親の魂と再会（覚醒）し、支えられている実感で健康な万能感（幼児的ではあるが）を得て立ち上がる。

（葛城ミサトのカルテ 29歳：参考）

仕事で家庭を顧みない父親に憎しみを感じていたが、セカンドインパクトという大災害時に父親の命と引き換えに救われたことで父親へのアンビバレントが増強された。その際に、生じた強い罪業感には後に様々な形でミサトを襲い、ミサトは対処行動に追われる。これが、ミサトの逸脱行動を含めた行動化の原点であると考えられる。また、セカンドインパクトの衝撃で失語症となるが、その後、その強いトラウマが反復されている様子は見られず、PTSDが生じているアスカとは異なり、一過性の急性ストレス反応と言えるであろう。

恋人（加持リョウジ）に父親の姿を求める自分に気づき自ら離別したり、父親の敵討ちの為にネルフに就職したりするなどファザーコンプレックスを認める。父親に翻弄された弱い母親を反面教師として父親への愛着を否定し（エレクトラコンプレックスも関与しているであろう）、男性的側面を強化し、がさつさや強さを前面に出して反動形成を試みるも、父親なる者を求めて得られない虚しさや見捨てられ不安をカバーしきれていない。

また、アルコールやSEXへの耽溺傾向が見られ、何かに溺れることで現実や内界にある問題を否認しようとする心性は嗜癖者そのものである。更に、肝心な部分でSEXを道具として用いる行動は、境界型人格障害者が多用するパターンでもある。そこには、操作という側面とともに自己を傷つける自傷行為としての側面があり、ミサトの深い罪業感が窺われる。診断としては、境界型人格障害傾向者が持ち、見捨てられ不安を嗜癖行動（依存症）で何とか対処している可能性を考える。

5. 映画のシーンからの事例検討

エヴァンゲリオンの登場人物の生育歴、家族歴、病歴（エヴァパイロットとしての経過）および精神症状等を伺わせるものを映画のシーンから抜粋して、登場人物の病理性を詳細に検討してみる。素材として、「DEATH(TRUE)²」・「Air」・「まごころを、君に」の旧劇場版を通して行う。最初に記載してあるCはチャプター番号を示している⁹⁾。

（「DEATH(TRUE)²」：TV版第壹話「使徒、襲来」～第貳拾四話「最後のシ者」のダイジェスト）

- C3：アスカの外傷体験、「人類を守るエリートパイロットに選ばれたの、世界一なの。だから皆が優しくしてくれる」「寂しくなんかない」「パパがいなくても平気」「私を見て！」外面的な成功は本質的な失敗（母の自殺：本当はエヴァのコアに取り込む為に殺された？コアが準備出来たのでアスカがパイロットに選ばれた）と同時に生じている。「成功＝幸せ」の図式が防衛手段として強化再現されることとなる。
- C2-C3, C6-C7：ミサトの外傷体験、幼少期「ママの様にはなりたくない。パパがいないと泣いてばかり」「泣いては駄目」「甘えては駄目」「良い子にならないといけない」と家庭を顧みない父親不在の中でしっかり者を演じるが、でも「父は嫌い！」だから「良い子も嫌い」と過剰適応して過ごしてきた幼少期と14歳でセカンドインパクト（嫌いな父親の命と引き換えに救出された）に遭遇した事実からアンビバレントを抱える様になるが、対処できず2年間の失語症期を経た。いい加減で刹那的に生きる自分を作り出すことで対処（コーピング）し、生きている実感を確認しようとしているが（アスカに「生き方が

わざとらしい」と看破されている)、恋人加持は結局父親を投影している存在であり、ファザコンを克服しきれていない。

- C 7, C 9 – C 10: シンジの外傷体験、(母親が死んでから)先生の所に預けられていた時は、穏やかで何もすることがない日々を送る。「何もなくても良かった」「生きることに何もなかったから」「他人はどうしても良かった」でも「父さんは嫌いだった」と他者との関わりを避けて生きていたことを語る。現在の自分が置かれた現状は過酷であり受け入れられないので、自らの判断を停止して命令のまま動いている(「人の言うことには大人しく従う、それがあの子の処世術だから」とリッコが語る)。しかし、「逃げちゃだめだ!逃げちゃだめだ!」と自らに言い聞かせエヴァに乗り使徒を殲滅するが、重圧に耐えかねてネルフから逃げ出す。しかも、逃げて行く場所がなく「仕方無いから乗る」と舞い戻る。トウジやケンスケ(同性の友人=サリヴァン言うところのchumship)との関わりで「卑怯で」「臆病で」「ずるい」自分の醜さを直視することが出来、自らの意志でエヴァに乗り街を救出する(この時期は同性の友人との関係が重要)。トウジやミサトに認められることで多少の自己肯定感が芽生える。両親への心理的依存から徐々に抜け出し、同世代の仲間との人間関係から対等の価値観を築く「学童期～青年期前期の課題(仲間とのコミュニティの形成)」に触れているが、「学童期の課題(集団への基本的適応)」に必要である両親の理想化や同一化という課題をクリアしていない(シンジ・アスカ・ミサト)は歪な反応である。
- C 13: アスカの表現型(人に見せている部分=コーピング)への評価は、「傲慢、高飛車、生意気、変わり者、我儘、見栄っ張り、冷淡、二重人格、バームクーヘン、薄

情者、自意識過剰、いけすかない女、いやーな感じ」と散々たるものである。他人と深くかかわることで傷つくことを恐れるがあまり、棘を出して(障壁としてのA.T.フィールドを展開)いるアスカの姿が窺える。アスカは、ヤマアラシの様に棘で他者を遠ざけるが、一人では寂しく大人で自分を包んでくれそうな加持に思慕の情を寄せる。しかし、加持には受け入れられないので代理としてシンジに関心を寄せ、シンジの側に寄りたいたいだけでも自分を傷つけそうな子供のシンジには近づけない「ヤマアラシジレンマ」が生じるのである。カヲルが「他人を知らなければ裏切られる事も互いに傷つくこともない。でも寂しさを忘れる事もない。人間は寂しさを永久に無くすことは出来ない。人は一人だからね。ただ忘れることができるから人は生きてゆけるのさ。常に人間はこころに痛みを感じている」と語るが、これは発達上の課題というより人間としての課題であろう。

- C 15: 「もう私がいる理由もないわ」とアスカが語るのは、ミサトとリッコが言う様に、(自分を支えてきたコーピング=対処行動様式が崩れ去り)アスカのプライドはズタズタになっている。そこでレイが語るように「心を開かなければ(エヴァ)は動かないわ」と頑張ってきた優等生が些細なきっかけから「取り返しがつかない失敗をした」と思いこみ動けなくなる、過剰適応型引きこもりにみられやすい心性が指摘されている。周囲のパワーに圧倒されて萎縮している母子分離不安型ともいえる受動的なシンジの引きこもりとは行動自体は似ていても対極をなすものである。人格傾向としては、アスカは自己愛的とするならシンジは回避的と言える。また「私は人形じゃない」と語るレイに自我同一性獲得の萌芽がみられる場面でもある。
- C 19: 「自分には(エヴァに乗る)他に何

もない」「(これだけが)皆との絆」とレイは語るのは無(零)の自分が存在する唯一の価値と考えている事柄である。しかし、シンジとの関わりで「他者との感情的交流が芽生え、笑顔や涙の意味を知る」また命令では無くシンジの為に自らの意志で行動するなど、自己犠牲や異性との一体感を求める青年期中期～の課題に直面している(声のトーンが以前の機械的なものから情感が込められているものへ変化している)。レイが零で無くなった瞬間であり、「DEATH(TRUE)²」のハイライトシーンであろう。

- C28: 「父さんってどんな人?この頃分かったんです」と加持にシンジは問うが、「分かった気がするだけ」「人は他人を完全に理解することは出来ない。自分自身だってあやしいもんさ」「100%理解し合うことなんて不可能なんだよ。だからこそ、人は自分を知らうと努力する。だから面白いんだよ、人生は」と語る(この台詞は「こころの専門家」にとって胸に刻むべきものでしょう)加持は、「分かってもらえない」と傷つくのを恐れ、心を閉ざすシンジに、分かり合えないからこそ面白いと教え諭す。父親との信頼関係を築けていないからこそ、完璧に理解しようとする未熟な万能感に捕らわれたシンジに対する加持の関わりは、現実を教える教師や父親の役割であろう。そしてこの物語の重要なテーマについて語っている部分でもある。
 - C30: 「裏切ったな、僕の気持ちを裏切ったな!」「父さんと同じに裏切ったんだ!」とシンジはカヲルに激しい怒りを向ける、これは傷付かないように心を閉ざしていたのに、信じては裏切られるという最も恐れていた出来ごとが生じたための反応である。自己愛憤怒であると言えよう。ここでシンジはカヲルを殺すのであるが、命令であるからと言うより、上記のようにシンジ自身の課題に直面しての過剰な反応である。他者との親密な関係を形成する課題は、安定すれば「良い部分」も「悪い部分」も統合して一つと認識可能となるが、幼児期の課題である「基本的信頼感」が欠如しているシンジにはカヲルは統合した人格とは映らず、以前の「全て良いカヲル君」から「全て許せない使徒」と見なされたのである。一時的にせよ対象恒常性(他者を場面場面で判断せず、安定した人格として評価する)を欠いた「境界性人格障害水準」にまで自我機能は低下しているのである。
 - C32: で流れるパッフェルベルの「カノン」は、登場人物の心は、それぞれ異なる位相で進行するのであるが、それでいて調和(ハーモニー)を織りなしているとの意図で述べたC28の加持の台詞を象徴するものでしょう。別の観方をすれば、第二新東京市・第三中学校でのカノンの演奏(弦楽四重奏)は、パラレルワールドとしてのもう一つのエヴァの世界なのかもしれない。TV版・劇場版・新劇場版およびマンガ(碇シンジ育成計画など)と位相を変えた世界が展開されている(「ひぐらしのなく頃に」も同様)。C11でアスカらしい人物の声で、「良いわねチェロ(シンジ)は、和音のアルペジオだけなんだもの」とあるが、どの世界でもシンジは同じ役割ということか?
- (「Air」: TV版の第貳拾五話「終わる世界」の改訂版)
- C2: 「ミサトさんも綾波も怖いんだ」「助けてよ、アスカ」の台詞は、シンジにとってミサトもレイも母なるものを象徴している。カヲルを殺して生じる自責感が超自我(ここでは母なるもの)からの懲罰として感じているのであろう。アスカは、シンジにとって他人である(更に、母なるも

のに成りきれない未成熟さ)が故に、逃げ場として選ばれた。その様な混乱した状況なのに、そうした状況だからこそ、異性への関心と性欲が噴出し自慰行為に至るのである。「最低だ！俺」と、いつもは「僕」と言うシンジの中で疾風怒濤の思春期中期が始まっていることを示している。

- C3：目覚めた第3番目のレイは、今までレイ（第2番目）が唯一の絆の象徴として大切にしていた（レイが死にかけた際に割れた）ゲンドウの眼鏡を壊して部屋を出るシーンは、ゲンドウのみを絆と考えていたレイからの出奔、自らの意志で自分の進む道を決める決意の表れであろう。精神医学的に見て、この「出立」は自我が大きく揺さぶられ、精神障害を引き起こすリスクファクターでもある。
- C6：ミサト「立ちなさい！」シンジ「嫌だ、死にたい。何もしたくない。」ミサト「あんた未だ生きてるんでしょ！だったらしっかり生きてそれから死になさい！」は、情けない主人公シンジに苛立つミサトに視聴者は同一化するであろう。このシーンだけみれば、シンジの回避性のみが際だつ。
- C7-C8：アスカの「死ぬのは嫌！」との叫びで、式号機の母親の魂が覚醒する。A.T.フィールド（絶対恐怖領域）は、自己を他者から引き離し、孤独を感じさせ、自分を守らんとするが為には他者を傷つける障壁であるが、エヴァや使徒が防御用に用いるように、個体を守る防壁とも考えられる。つまり、アスカが気付いた様にA.T.フィールドがあるが故に、他者が存在し見守ったり関わったりすることが可能となる。他人（他の個体）と繋がることも可能な枠組みであり、これがあるので「真の絆（同一化ではなく）」も生まれ得るのであると理解する。アスカの表現型は自己愛的であったり演技的であったりするが、

アスカ自身は強固過ぎるA.T.フィールドの為、他者はもちろん自分自身とも触れ合うことが出来なかったのであろう（他者が存在してはじめて自分が存在する）。自我境界の強固さから考えれば、「強迫」がメインの病態なのであろう（強迫症状は見られないが）。群体として存在する人間は、A.T.フィールドがあまりに強固だと他者を傷つけ、弱いと自分が無くなる。群生生物の限界が、単体としてより強固な（A.T.フィールドが強固でも構わない）存在である使徒となるべきだという考えがゲンドウの補完計画であると言い換えも可能であろう。

- C9：ミサトの「ここから先は自分で決めなさい」の台詞は、時間がいないために急激な自我の確立を促すものである。当然この荒療治は感動的ではあるがあまり有効ではなく、「僕はエヴァに乗るしかないと思っていた」「何も分かっていない僕はエヴァに乗る価値もない」と一見回避に見える行動も、今まで無自覚に他人の意見に従って行動してきた自分を反省し、自ら考えて「行動しないことを選択」しているシンジの行動を変えるには至らない。「僕は人を傷つけることしか出来ないんだ」「だったら何もしない方がいい！」とのシンジの返答に「何もしなかったら許さないからね」と応えた後に、糠喜びと自己嫌悪重ねるだけであった自己の半生を開示している。「エヴァに乗り、何のためにここに来たのか？何のためにここに居るのか？今の自分の答えを見つけなさい」と自我同一性の確立を迫る。さらに「大人のキスよ」と男になりつつあるシンジの肉体に働きかけることでだめ押しを図る（TV版でも、傷付いたシンジをSEXで慰めようとするシーンもある）。目的達成のためには手段（自己の身体を道具として用いる）を厭わない境界型人格障害的な特性を持っていると考

えられる。しかし、この行為の本質には、「自己をめちゃくちゃにしたい」タナトスと同義であるデストルドー（死の欲求＝ゼーレの補完計画と同質）が作用しているのであろう。

（「まごころを、君に」：TV版最終話「世界の中心でアイを叫んだけもの」の改訂版）

- C13：ゲンドウは自らの右手にあるアダムの肉体をレイの肉体に埋め込みそれを自分の魂と共にリリースに帰還させてアダムとリリースの融合を図ろうと試みるが、レイはゲンドウとの一体化を拒否する。「何故だ？」と問うゲンドウに「私はあなたの人形じゃない」「私はあなたじゃないもの」と応える。レイが明確に自分の意志を持って今まで最も重要視してきた絆を自ら断ち切った瞬間である。ゲンドウよりもシンジを重要視するのである。心理的親殺し（厳密にはゲンドウはレイの親ではないが）を行い、親から心理的独立である出立を行ったのである。
- C15-C18：補完が始まり、シンジ、ミサト、アスカの過去の記憶や想念が流れ込む。一人ぼっちで寂しさを感じていた幼いシンジ、自分の存在を確認するために（体だけでも必要とされている、自分が求められている感じが嬉しい：「境界例」がしばしば用いるフレーズ）SEXに溺れる大学生のミサト（青年中後期の課題である性的パートナーとの接触で定型発達であるが、孤独や親との葛藤回避の側面もある）。実はシンジを強烈に意識していながら、「完璧に理解してほしい」強迫的な考えから、「完璧でないと要らない」と拒絶するアスカ。すでに人類の祖（母）であるリリースとなったレイとの問答で「曖昧なものは僕を追い詰める」「本当のことはみんなを傷つけるから、それはとてもとても辛いから」と本当のものも曖昧なものも耐えられないシン

ジの弱さが浮き彫りとなる。アスカに助けを求めるが、「本当に他人を好きになったことがないのよ」「自分しかここにいない」と更に直面化を強いられる。「哀れね」とアスカは述べた後で暴れるシンジの攻撃性を受け止め（イイヨ）と言ったかに映画では聞こえるが、脚本を読むと拒絶して（イーヤ）とアスカが応えたことになっている（ダブルメッセージとなる様に曖昧な発音とした？）。他者からの拒絶に耐えられないシンジはアスカの首を絞める。

- C19：首を絞めること、つまり自分を拒絶する他者は要らない！と神に等しい存在となったシンジは判断する。アスカもA.T.フィールドを展開するのを止めて無抵抗にデストルドー（フロイドの言う「タナトス＝死の本能」）に従う。ここから人類の融合（補完）が急速に進行する。ここでシンジはリリース＝レイと問答を開始する。このあたりから、露骨なメッセージ性の強い話の展開となる。普通は、映画ではメタファー（隠喩）を用いてメッセージを伝達するものであり、特に「新世紀エヴァンゲリオン」はその傾向が強い。しかし、TV版最終二話と同様に、作者は煮詰まってしまっているのか、あからさまにすることで、視聴者のファンタジー（エヴァでは「夢」と表現している現実と真実の区別がつかない状態）による誤解を直面化させているのか？あまり類を見ない技法である。シンジは他人も自分と同じであると思ひ込み、勝手に恐れたり傷付いたりしていることをレイが指摘する。シンジは「皆、僕が要らない！だから皆死んじゃえ！僕も死んじゃえ！」と応じる（ゼーレの補完計画に沿う）。レイは、更に「その手は何のためにあるの？」「その心は何のためにあるの？」と問いかける（他者の存在を認めさせようとする意志が存在する）そして「何のためにここに居るの？」との問いに「こ

ここに居てもいいの？」と問い直すシンジにレイは無言で判断を本人に委ねる。抱える問題の核心の答えを得られずシンジは混乱し絶叫する。つまり他者に拒否されるかもしれない不安に圧倒され、自我機能は停止する。そこで融合への補完（ゲンドウの補完計画）が本格的に開始する。レイはその状況を「世界が哀しみに充ち満ちてゆく」「虚しさが人々を包み込んでゆく」「孤独が人の心を埋めてゆく」と否定的に捉えている。ゼーレも、リリス及び黒い月（リリスが地球に飛来した際の乗り物、アダムのものは「白い月」）に人類が統合されるのを、「始まると終わりは同じところにある」「これでよい」と受け入れている（原罪以前の状態になる）。ゲンドウはユイに会い、満足した状態で「自分が側に寄るとシンジを傷つけるだけ」「だから何もしない方がよい」と子供と安定して関わることが出来ない（自分の親との葛藤の再燃）中年期の課題をクリア出来ていない。その背景にはシンジと同様に「自分が他人に愛されるわけがない（逃げている、世界を拒絶している）」との考えに固着していることが明らかとなる。シンジが乗る初号機に喰われることで息子との合体を果たすと共に妻の魂とも合一を果たす。シンジも初号機と共にリリスに取り込まれる。そこでは様々な人物の想念が流入する。ミサトやレイの想念が「そんなに辛いなら」「逃げてもいいのよ」「一つになってもいいのよ」と語るが、アスカの想念は「あんたとだけは絶対に嫌！」とシンジとの補完を拒否している。

- C20：シンジとレイの問答は続く。「他人の現実と自分の真実の溝が把握できないのね。夢の中にしか幸せを見いだせないのね。虚構に逃げて真実を誤魔化していたのね。」と引きこもるシンジの生き方を厳しく糾弾する。「僕ひとりの夢を見ちゃいけ

ないのか？」との反論に「それは夢じゃない。現実の埋め合わせ」とさらに現実逃避を直面化する。「僕の夢はどこ？」「それは現実の続き」「僕の現実はどこ？」「それは夢の終わり」と、しっかりと現実を生きることを論ず（エヴァに出てくる「夢」には前述の様に2種類存在することに注意）。

- C21：そして、A.T.フィールドを失った状況でレイと一体化した状況での問答。この状況はシンジが望んだ世界であり、安心して冷静な判断が可能である。「ここには僕が居ない」と再びA.T.フィールドが存在する、他人の恐怖（Absolute terror）が始まることを了承する。つまり、他人とは絶対に完璧には分かり合えないが、分かり合えるかもしれないとの希望を持ち（祈り）生きていくと決心する。自我の確立である。「真実はその人の心の中にある」「新たなイメージがその人の心も形も変えていく」「唯、人は自分自身の意志で動かなければ何も変わらない」とのリリス（レイ）とアダム（カヲル）とユイからのメッセージを受け取り、シンジの決断はさらに固まりゼーレの補完計画もゲンドウの補完計画も失敗に終わり、人類の融合は中断する。
- C22：ユイはエヴァと共に1人で永遠に生き続ける決断をする。人類が生きた証として…。シンジはその思いを感じて、果たしていなかった母親からの（精神的な）分離独立を果たす。補完を拒否したシンジではあるが、補完未遂後の世界は、荒涼たる世界であった。アスカと2人だけの世界で、シンジはアスカの首を絞める。C19でアスカの首を絞めた際に、アスカはA.T.フィールドを展開することなく、なされるがままに任せた。また逆に、アスカはシンジとの融合を「あんたとだけは絶対に嫌！」とも述べている。そこでシンジは、アスカと最も近づけた「首

絞め（A.T.フィールドを展開しない自他未分化状態）」を行ったが、アスカはA.T.フィールドがまだ十分に展開できずに、シンジの心に共鳴もしていたため、シンジの頬を撫でる。しかし、それはシンジが決意した独立した個としての生き方とはほど遠く、憐憫と馴れ合いの世界である。そこでシンジは情けない自分に涙するのだが、A.T.フィールドが戻ったアスカは、他者であるが故に理解できないシンジの行動を「気持ち悪い」と吐き捨てる。これでは以前と同じだと思ふかもしれないが、アスカはリリスの象徴の包帯に包まれており、いずれ人類の母として生きていくのであろう（「創世記エヴァンゲリオン」の始まり）。こうして、どこかで完成（補完）されることはなく、不完全なままで、逃避した夢の世界ではなく現実の世界で傷つきながらも直面した課題をクリアしていくことで魂（こころ）の成長は続いて行くのである。

6. 思春期の自我境界と精神障害

（A.T.フィールドと精神病）

以上の説明を踏まえて、A.T.フィールドの強弱と精神病発症について考えてみる。A.T.フィールドは前述の様に「（外的）自我境界」を意味するものであろう。ここでは精神分析理論に基づいた自我境界論を示す。フェダーンは、自我（心のコントロールセンター）と外界との間に外的自我境界、また自我とエス（欲求・無意識）との間に内的自我境界を考えた（図3 A.）。つまり自我境界とは主観的に自己と感ぜられるものと感ぜられないものの境目である。西園はグッティルの考えを参考にしながら、外界やエス（欲求）に対する自我の構造を以下のように考えた¹⁰⁾。

ヒステリー（図3 B.）では、外的自我境

界（A.T.フィールド）が脆弱で外的刺激の影響を受けやすく、被暗示性に富む。自我の同一性を守るために内的自我境界を強化して、本能的欲求を抑圧する。逆に強迫性障害（図3 C.）では、無意識的欲求が自我に侵入してくるため、自我の崩壊を防ぐには外的自我境界（A.T.フィールド）を強化せざるを得ない。そのため、同一性保持目的で自分なりの規則へのこだわりが出現する。ヒステリーが内的自我境界を、強迫性障害が外的自我境界を強化して自我同一性を確保しようと試みている。アスカは、強迫的心性を持ち、無意識に存在するファンタジーの母親に強く影響されているが、無意識に圧倒された自我は強固なA.T.フィールドにより外へも漏れ出せず自閉するしかなかったのだが、エヴァの中（アスカの外部）に存在する母親とアスカの自我は出会いファンタジーを克服する。内的自我境界が強化され、同時にA.T.フィールドが外部との窓口でもある意味を知ることとなる（覚醒）。さらに前田は、統合失調症（図3 D.）の場合には、内外の自我境界ともに上記疾患より希薄な状態（綻びが大きい）で、無意識的内容が自我に容易に侵入し、外的現実と自己との差異が曖昧で影響を受けやすく漏洩もしやすいと考えた¹¹⁾。統合失調症は自我そのものの喪失である。A.T.フィールドを失った状態は、「自分も他人もない、とても脆弱な世界」であり、人類は孤独であるという現実を補完した姿なのであろう。ゼーレの補完では、自我境界は消失し、区別が存在する以前の魂の状態（魂の集まる場所＝ガフの部屋）に戻ること、つまり一度「死ぬ」のが目的であり、ゲンドウの補完ではその外に強固な外的自我境界を構成し、全ての魂が融合した単体で完璧な生命体（永遠の生命を持つ使徒+知恵のある人類＝神）へ進化するのを目的とする。しかし、統合失調症では他者はA.T.フィールドを持ちながら、患者のみがA.T.フィールドを失っ

た状態であるのでとても自分だけが無防備で、脆弱な状態であると言えよう。

(A.T.フィールドの取り扱いと自我の確立)

寒さの中、二匹のヤマアラシが暖め合おうと近づく。しかし、近づきすぎるとお互いの体の針（自我境界）が相手に刺さってしまう。かといって離れると寒くなる。二匹は近づいたり離れたりを繰り返し、ようやくお互いに傷つかず、寒くも無い距離を見つける。この状況を「ヤマアラシジレンマ」と呼び、哲学者ショーペンハウエルの寓話を元にフロイトが言及して流布したと言われている¹²⁾。この寓話をエヴァ的に解説すれば、強すぎるA.T.フィールド（自我境界）は、他者から自分を守ると同時に他者を傷つける可能性を持つものであり、弱すぎるA.T.フィールドは、自他の境目が曖昧になり「自分」がなくなるのである。そこで、人間はA.T.フィールドを展開したり中和したりしながら、対人コミュニケーションを行い、健康な自我機能を維持するのである。この中和や展開が上手くいかない場合に人は人によって傷つくのである。適切なA.T.フィールドの中和と展開を覚えることである「自分（自我同一性）」を獲得するのが思春期の課題であり、エヴァンゲリオンのテーマの一つであろう。

7. おわりに

1983年に浅田彰が予言した通り、「おとな」は、物事をインテグレート＝統合するパラノ（偏執）的生き方に固執し、「わかもの」はディファレンシエート＝分化するスキゾ（分裂）的生き方に逃げ込む傾向が進んだのが21世紀の日本であるのは間違いないであろう¹³⁾。パラノは、固執する価値観の揺らぎに遭遇すると命を絶つ＝無に帰す（惣流・キョウコ・ツェペリン）しかなく、スキゾ

は、逃げられなくなると引きこもる（シンジ）しかなくなることもあるであろう。中高年の自殺の増加と、現実から退却する若者の増加がそれを象徴している。また、そのどちらにも染まらず、世の中の曖昧さにも耐えきれずに「黒か白か」の二分法で揺れ動くボーダー（ミサトの不安定時）は刹那の現在のみを生きるしかないのも現代日本の若者像のひとつであろう。エヴァンゲリオンは多くの若者の心を捉えたが、「確立した自我」というパラノ的な「おとな」としての「幻の自我同一性」を求められて、窒息しそうな主人公・碓シンジ君にスキゾであり続けたい「わかもの」が共鳴したのもその一因ではないかと考えている（しかし、シンジ君は最終的には逃げずにパラノ世界の「おとな」として生きる道を選ぶ）。筆者が、こうして拙文を書いているのも、「逃げちゃダメだ！」と迷いながらも叫ぶ私の心に住むシンジ君に、「逃げるのもありだよ」と語りたいたからかもしれない。「逃げる」「逃げない」とインテグレートするはずも無い絶対的矛盾を内包したままで、二分法の世界にも陥らずに曖昧な自我の同一性を維持するべく、漂泊者として今日も転がり続けるのが新世紀の「健康な若者」なのかもしれない¹⁴⁾。

文献

- 1) 五十嵐太郎編：エヴァンゲリオン快樂原則。
第三書館，東京，37-58，1997
- 2) 北村正裕：完本 エヴァンゲリオン解説 そして夢の続き。静山社，東京，15-35，38，2010
- 3) 特務機関調査プロジェクト：すべてのはじまり，すべての終わり エヴァンゲリオンの謎。
青春出版社，東京，191-202，2009
- 4) 前田重治：続図説 臨床精神分析学。誠信書房，東京，26，1994
- 5) 速水栄&サーフライダー21：エヴァンゲリオン極限心理分析。彩流社，東京，158-161，2010
- 6) American Psychiatric Association :
Quick Reference to the Diagnostic Criteria from DSM-IV-TR. American Psychiatric Association, Washington, D.C., 2000 (高橋三郎, 大野裕, 染谷俊幸訳：DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引。医学書院，東京2002)
- 7) Freud, S. : Analyse der Phobie eines fünfjährigen Knaben. 1909 (総田純次訳：フロイト全集(10), 「ある五歳男児の恐怖の分析 (ハンス)」。岩波書店，東京，1-176，2008)
- 8) Sullivan, H.S. : Conceptions of Modern Psychiatry. W. W. Norton & Company Inc., New York, 1653 (Sullivan著，中井久夫, 山口隆訳，現代精神医学の概念。みすず書房，東京，43-73，1976)
- 9) 庵野秀明監督：Neon Genesis Evangelion Death(Truе)² : Air/まごころをきみに。キングレコード，2003
- 10) 西園昌久：薬物精神療法。医学書院，東京，194-198，1967
- 11) 前田重治：図説 臨床精神分析学。誠信書房，東京，37-45，1985
- 12) Freud, S. : Massenpsychologie und Ich-Analyse. 1921 (藤野寛訳：フロイト全集(17), 「集団心理学と自我分析」。岩波書店，東京，127-223，2006)
- 13) 浅田彰：逃走論筑摩書房，東京，10-16，1986
- 14) 小坂国継：西田哲学を読む3 「絶対矛盾的自己同一」。大東出版社，東京，p197-238，2009